

教育家としての張謇
松婷（愛知教育大学大学院）
Pioneer educator Zhang Jian
Song Ting

1. はじめに

張謇(ちょう けん)は、中国近代の実業家、政治家、教育家である。張謇は、中国の初級中学校の歴史教科書に登場している。初級中学校の歴史教科書、八年級の第25課「経済と社会生活の変化」では、「日清戦争後、状元としての張謇は官途を断念し、故郷へ帰って、南通市に大生紗廠を設立した」⁽¹⁾と記述されている。単元の教学目的は張謇が国家の危機に直面した際に、民族工業の発展にどのように貢献したかに重きを置いている。しかし、現在の中学校の歴史教科書には、彼の教育分野での活動内容については、十分に触れられていない。そこで、張謇に関する残された日記などの史料を用いて、彼が中国の近代教育にどのような役割を果たしたのか述べる。

2. 張謇の生涯

張謇(ちょう けん) (1853～1926) , 字は季直, 号は嗇庵。江蘇省の南通市に生まれた。清末民国初期の政治家・実業家・教育家である。1894年 41 歳で科举制度最上位の状元となり翰林院修撰となった。清末には江蘇諮議局議長を歴任した。国民政府成立後は、政府実業部部長に任ぜられ、北洋政府時代には農商総長及び全国水利総長に任ぜられた。

表1は張謇の年表である⁽²⁾。

表 1 張謇関係略年表（筆者作成）

年代	年齢	主なできごと
1853	0	江蘇省海門県常楽鎮に生まれる。
1856	3	父より『千字文』を学ぶ。
1856-1863	3-10	浙江省海門の邱大璋の学塾に学ぶ。
1865	12	『論語』, 『孟子』, 『詩経』, 『尚書』, 『周易』を読んだ。
1866	13	『礼記』, 『春秋左伝』を読んだ
1868	15	科举試験を受け始めた。
1874	21	江寧発審局委員である孫曇錦の招きに応じ、江寧発審局の書記になる。

		12月，徐氏と結婚する。
1881	28	呉長慶に従って済南に行き，巡撫と海上防事を相談した。
1882	29	朝鮮に壬午事変おこり，呉長慶命を奉じ軍を率いて朝鮮に出動，張謇ために前敵軍を担当する。 7月，慶軍とともに，朝鮮に行く。 『壬午東征事略』，『朝鮮善後六策』を書く。
1885-1893	32-40	会試は試験に合格せず 郷里のために蚕桑事業を改良・発展させた。 長崇明瀛洲書院に務めた。
1894	41	恩科会試に応じ，一甲一名進士に中り，翰林院修撰を授かる。
1895	42	12月，総督張之洞の聘に応じ，南京の文正書院院長となる。
1899	46	大生紗廠業務を開始する。
1901	48	『変法平議』を書く。文正書院院長を辞す。 11月，通海懇牧公司业务を開始する。
1902	49	通州師範学校創立を準備する。 『学制奏略』を書く。農学堂を設置。
1903	50	4月，師範学校を開学する。 4月25日（西暦5月21）から6月6日（西暦7月29日）来日計70日間。 呂四塩業公司・漁業公司創立を準備する。
1905	52	江蘇教育会会長に任ずる。 11月，南通博物館を創建する。
1906	53	水産学校・通州女子師範学校開校。 通州師範学校に土木，工科，測絵特班を附設。
1907	54	金沙市立高等小学設立。
1909	56	江蘇諮議局開会し，当選して議長となる。 国会請願運動を発起する。
1910	57	南京南洋勸業会を開館とし，勸業研究会を設立する。
1911	58	中央教育会会長となる。 八月，武漢に行き，大維紗廠開業式に参加する。

1912	59	盲啞学校を創建する。
1913	60	軍山気象庁創建を企画する。 入京して農商部総長に任ずる。
1914	61	医院，南通貧民工場設立。
1915	62	農商部総長を辞す。
1916	63	盲啞学校開学，气象台竣工する。
1917	64	南通図書館開館する。
1918	65	国際税法平等会を上海に設けることを主張し，推されて会長となる。
1919	66	演劇学校を設立する。12月，淮海実業銀行通州総行開業する。
1926	73	南通保坍工程を視察する。八月二十四日，永眠。

表1から分かるように，張謇の生涯は官職を辞して実業界に入った時期を界とし，2つの時期に分けることができる。

前期とは，1894(明治27)年に状元となって朝廷の官職に就いた時期である。張謇は1853年7月1日，江蘇省海門常楽鎮（現海門市常楽鎮）に生まれた。張謇の父親は農業に従事しながら，商業を兼ねていた。父は幼い頃に貧しく，字を覚えただけで学校を中退した。彼は四男の張謇に最大の望みを託した。張謇は幼いとき，家庭が比較的裕福だった。父親が息子の大成を心から願っていたため，張謇が4歳のときに読み書きを教えられ，一年後には付近の私塾に入った。邱大璋の教育を受け，10歳までにはすでに『三字経』，『百家姓』，『大学』，『論語』，『孟子』などの書籍を学び終わった。11歳のとき，父は張謇の学問の上達のために，故郷の西亭から秀才（科挙に合格した者の俗称）である宋先生を招き，13歳のときには『礼記』を学び終えていただけでなく，八股文を書けるようにもなった。

張謇は15歳の時から科挙を受け始めたが，江蘇省南通市の習慣によると，三代の間に科挙で秀才以上の成績を登録したことのない家は，「冷籍」と呼ばれた。張謇の親族にはその記録がなく。そのため，如皋県の張駒という張氏の籍に偽って張謇を入れ，受験の資格を得た。張謇は学籍に登録して科挙の院試に参加し，秀才に合格した。しかし，籍を偽って試験を受けたことはもとより違法で，張駒はこれにつけ込み，張謇の家に絶えずお金を要求してきた。これは“冒籍”事件といわれる。“冒籍”事件が終わったあと，張謇はもとの戸籍に戻った。しかしながら，この事件は青年期の張謇に深刻な精神的打撃を与え，農家の出身であることの苦しみと辛さを初めて体験させることとなった。

1874年には，21歳の張謇は発審局の書記になった。この時から，張謇の幕僚生活が始まった。1876年，23歳の張謇は呉長慶の幕下に入り，機密書記を務めた。慶軍の統率者であ

る呉長慶のもとでの8年間の軍事生活中で、張謇は呉長慶に随行して朝鮮の内乱を解決した。中朝、中日、朝日の関係を処理する過程で、張謇はしばしば日本を敵と考えて研究した。これは張謇に日本に対して次第に多くの理解と認識を蓄積させた。張謇が日本という国に関心を持つようになった1870年代末の中国では、張謇は外国に出ることができる立場にあった。また彼は視野、思想観念などでより高いレベルに入って、中国のことを世界全体の中に入れて考え始めた。日清戦争勃発後、張謇は抗戦を支持しながらも、呉長慶の息子である呉彦復に送った手紙の中で、日本が明治維新以後、西洋を熱心に学び、急速に富強になったことに感心している。そこで張謇は、日本視察後の『東遊日記』にこう記している。「二十年来、実業、教育にいささか気を遣って、来遊し、その知識を増すことを求めたのである」⁽³⁾。また、8年の幕僚生活を経て、多くの経験を積んだだけでなく、精神でも大きく成長した。故郷に帰った後、科挙に受かるために勉強しながら、桑の栽培を提唱したり、漁業組合を組織したり、故郷のために積極的に働いた。15歳から40までの25年間、張謇は県試、州試、郷試、会試などの各約20回試験を受けた。

1894年、西太后の60歳を慶祝するために、朝廷では特別に試験が行われた。その時の張謇は科挙への長年の情熱がすでに消えて、試験に参加したいとは思っていなかったが、父親の勧告により、仕方がなく試験に参加した。しかし、この結果は予想を超え、最終試験では第一位である状元となった。1894年、張謇は光緒帝に拝謁した。朝廷の慣例に従い、新状元である張謇は翰林院修繕を授けられた。

後期とは張謇が官職を辞して、地方教育や事業を興した時期を指す。清朝は中国最後の封建王朝であり、張謇が状元の時には、清政府は「腐敗」の極にあった。張謇は「これらの腐敗現象に腹を立て、中国の当時の主要な問題は国家の貧困にあり、貧困の原因は抜け穴の多さにある」⁽⁴⁾と考えた。したがって、貧困と立ち後れを解決する方法は、まず穴をふさぐことにある。穴をふさぐ方法としては、まず中国人が実業を興し、国民生活に役立つ近代化工場を建設することだと考えた。彼は、仕官は庶民の金銭をかき集めるためではなく、憂国憂民であり、国の強民の富を図るべきだと考えた。そこで、彼は「実業救国」の主張をした。このような現実と認識のもとに、張謇は状元に合格した翌年に官職を辞して実業に専心した。下関条約の締結後、多くの外国資本が中国に工場を建設した。外国勢力の経済侵入を阻止するため、朝廷の大臣張之洞は張謇を南通市に招いて工場を建てさせた。1899年後半から、張謇は主に故郷である南通市の実業や教育事業を興し、南通市の地方自治に携わり、立憲運動に奔走し、政府や社会団体の役職をつとめた。

3. 張謇の日本での視察活動

1903年、日本で第五回の勸業博覧会が開催された。中国の官紳は政府から派遣されたり、日本から招聘されたり、自費で視野を広げたりして日本視察のブームを作った。張謇は江

寧日本国領事館の領事である天野恭太郎が三江師範教員徐乃昌に依頼して送った大阪博覧会の招待状を受け、彼はこの機会に一度考察してみるのには極めて便利な事であると考え、自らの目を通して日本の変貌を確かめたいと思って、それに応じた。

日本滞在の70日間、張謇は日本各地の教育機関を視察した。日本各地の市町村の小中学校、師範学校、実業学校の施設や学校運営などを詳しく調査した。学校の訪問状況を整理すると表2のようになる⁽⁵⁾。このような調査活動を通じて、張謇は考察するとともに、彼が当時の極度的に貧しかった中国の社会経済状況に適した学校教育の道を模索している。

表2 張謇が視察した日本の学校（筆者作成）

光緒29年	地域	訪問した学校	訪問した人物
4月29日	長崎	・私立鶴鳴女子学校 ・伊良林尋常小学校	校長：一瀬秀太郎
5月5日	大阪	・大阪市小学校創立三十年記念会	西村の紹介で、高等商業学校の校長・福井彦次郎と古株漢学儒学者・藤沢南岳と知り合いになりました
5月6日	大阪	・愛日小学校 ・愛珠幼稚園	愛日小学校の校長・高橋季三郎 幼稚園園長・塩野吉兵衛
5月7日	大阪	・東区第一高等小学校	校長・岡村増太郎
5月8日	大阪	・桃山女子師範学校	校長・大村芳樹
5月9日	大阪	・中之島高等工業学校	校長・安永義章
5月10日	大阪	・大阪府立師範学校	校長・森本清蔵，附属小学校主事・森川正雄
5月11日	大阪	・単級小学校の授業	
5月14日	大阪	・東成郡鶴橋村農学校	校長・一山麓
5月20日	京都	・染織学校 ・盲啞院 ・大学院	染織学校の校長・金子篤寿
5月22日	名古屋-静岡	・商業学校	商業学校の校長・岡田禎三
閏五月3日	横浜	・弘文学院 ・成城学校	章静軒 洪俊卿

			汪伯棠
9日	函館	・官立商業学校 ・私立尋常小学校	商業学校の校長・神山和雄
12日	札幌	・北海道農学校及び農 園試験場	北海道庁事務長・大塚貢 土木科長・武井吉貞
13日	札幌	・公立単級小学校	校長・柴田菊蔵
14日	札幌	・農学校博物館	
22日	東京	・高等師範学校	嘉納治五郎
23日	東京	・高等師範学校	校長・手島精一

張謇・凌文淵『癸卯東遊日記・籬盒東遊日記』（岳麓書社，2016）により筆者作成

表2から分かるように、まず、時間分布面では、張謇は大阪で視察する日が一番多く、次は東京である。その原因は、大阪で勸業博覧会を見学するのが、彼の訪日の最初の目的であり、また大阪は当時日本の第二大工業商業都市であったからである。滞在時間が長いもう一つの都市は北海道の札幌市である。張謇が札幌に夢中になった原因は二つある。まず、札幌は何もない都市から発展してきたのである。しかも、わずか20年で急速に新興商工業都市に発展した。張謇は、彼がリードする南通市もこのような迅速な成長を遂げられることを望んでいるので、ここで詳しい視察を行った。次に、札幌と中国の江蘇省南通市には類似点が多くあった。例えば、面積があまり大きくなく、長い歴史のある大都市ではなく、都市が広々とした農場に囲まれ、沿岸地区に位置するなどである。また、訪問の全過程で、張謇が立てた視察計画は「幼稚園、尋常高等小学校、中学校、高等、工場」という順序に従うものだった。この視察計画から、張謇の考えでは教育施設の見学は最も重要なのであることが分かっている。そして、視察を幼稚園、小学校から始めたことから、張謇が日本の基礎教育をかなり重視したことも明確である。それは、当時の南通市の教育が初級発展段階にあったためであるとも言える。

4. 張謇の日本近代教育制度の認識

張謇の日本の近代教育認識は次の2点があった。第一点は、近代日本の国民教育の普及することである。張謇は日本の町村単級小学校、尋常小学校を考察したとき、日本の社会の進歩と富強が大部分教育普及の成果によるものだと考えた。学校の程度や学校の運営費は地方の経済状況によって異なるが、教育に対する重視はどこでも同じであった。張謇が北海道の単級小学校を考察した際に、小学校の位置は遠いが、国家は農家の子供たちに良い教育を提供したと考えた。単級とは1つの学級に異なる学年の子どもたちがいる学級である。日本では「学制」公布直後の1873（明治6）年の小学校就学率は28.1%であったが、

その後約 30 年間に就学率は急速に上昇して90%に達し（1902）⁽⁶⁾、義務教育がほぼ完成したとみることができる。しかし、残念なことに、中国の学校制度の普及は遅々たる歩みであった。張謇が日本を視察した時点では、中国の近代教育制度はまだ確立されていなかった。このように義務教育の普及が遅れた最大の理由は、国民の大多数を占める農民の絶対的困窮であったと考えた。

第二点は近代日本が西洋の思想を受け入れたときの姿勢である。張謇は日本の学校の教科書を見たとき、修身（道徳）教育のような伝統的な教育的特徴のある学習内容も残っていた。日本は西洋の近代教育に関心を持ちながら、その伝統的儒教思想を根本に据えることを忘れなかった。張謇はこの点に注目した。つまり、張謇が関心を持っていたのは、伝統的アジアの教育思想の革新と西洋の教育思想の受容の問題に対して、日本がどう対処して解決したのかという点だった。

5. 近代教育の発展での張謇の役割

1903年の日本視察は、張謇は西洋の教育思想に対して直観的な認識を持たせただけでなく、東西の教育思想の差と相互間の受容に対してさらに深い認識を持たせた。彼は日本における教育の成果を目の当たりにし、政治制度問題への関心を強めた。日本政府の経験と清朝の腐敗との対比から、張謇は帰国後の地方自治において立憲君主制を積極的に推進し、地方教育は地方自治の重要な一環となった。

1922年、孫中山は上海で張謇の一人息子である張孝若に会って、張孝若に張謇に対する自分の挨拶を伝えるように頼んだ。孫中山は、張謇は南通市で地方自治の実際の成果を獲得したと言った。

張謇は近代中国の教育システムを構築しただけでなく、国家と地方のために多くの優秀な人材を育てた。そして、張謇は多くの各級各種学校を創設して、縦から見ると、初等、中等、高等がある。横から見ると、農学、医学、工学、金融、水産などの種類がある。同時に、彼が創設した各種の社会教育は、社会文明の向上にも重要な影響を及ぼした。先進的な教育理念、学用の結合の教育方法は、張謇の時代に重要な実践価値があるだけでなく、現代の教育の発展に対しても重要な示唆を持っている。

6. おわりに

本論文は、張謇が日本での視察活動を分析する上で、彼は近代中国の教育にどのように貢献したかを明らかにした。現在の中国では、21世紀の初めに設立された新教科「歴史と社会」（いわゆる社会科）は、歴史、人文地理とその他の人文・社会科学の関連知識を有機的に結合し、生徒が生活体験から出発し、社会を全体的、歴史的に認識するのを助けるという課程である。本論文の課題は、張謇を教材化して、近代史の内容として学習すること

ができるように，そして，教育家張謇の教材化を通して，解釈型歴史学習という方法に基づいて，中国近代史学習における授業モデルを提示することである。

注

- (1) 『中国歴史』八年級(下)人民教育出版社, 2017, p. 120
- (2) 『張謇伝稿—中国近代化のパイオニア』, 1989
- (3) 『張謇全集』, 第六卷『日記』 p. 25
- (4) 劉未鳴, 詹紅旗『張謇: 兼懷天下/百年中国記憶』, 中国文史出版社, 2019, p. 5
- (5) 張謇・凌文淵『癸卯東遊日記・籀龔東遊日記』, 岳麓書社, 2016
- (6) 日本近代教育史事典編集委員全編『日本教育史事典』, 平凡社, 1971